塩入　宏行　教授

埼玉大学紀要　教育学部，56(1)：145～153 (2007)

塩入宏行教授のご退職を記念して

大保木輝雄*

先生の本格的な研究教育活動は、東京教育大学大学院を修了された1968年４月、大阪体育大学体育学部における、剣道の専門家養成を皮切りに「文武不岐・文武両道」の精神に基づき、今日まで一貫して実践されている。６年間、草創期にあった大阪体育大学剣道部の充実と学生の教育に、それこそ全身全霊をもって任を果たされた。その後、すでに埼玉大学に着任されていた加賀谷熙彦先生から、佐藤顕先生の後任として強い要請があり、昭和49年（1974）４月、埼玉大学教育学部に着任されたのである。

平成19年（2007）４月１日付けをもって、定年という世の定めにより塩入先生は33年間の埼玉大学での諸活動に区切りをつけられる。先生の大阪体育大学に始まる39年の長きに亘る研究・教育活動は、年を重ねるにつれ輝きを増している。先生の姿を映し出すためには、語学者、教育者に加え剣道実践者（行者）という三つの側面からの照射が不可欠である。

塩入先生は、栃木県の義務教育に多大な功績を残された父君安三郎氏の長男として鹿沼市で生を享け、父親の影響もあってか幼少期から竹刀を握って成長された。しかし、長じて進まれた道は英米文学であった。(何と、この英米文学科の同級生に、本学音楽講座の西原先生、国文学科に国語講座の萩原先生が入学し、文芸誌「ユンゲン」の同人でもあった。）進学された東京教育大学は、東京高等師範学校の流れを受け継ぎ体育指導者養成の専門コースをもち、とりわけ武道に関しては西の武道専門学校、東の高師と並び称せられた武道専門家を志す者の憧れの的となる学校であった。先生は、近代剣道の父といわれる高野佐三郎の流れを汲むこの大学の剣道部に入部し、専門家を目指す学生と同じ修行をこなしたのであった。先生は、体育学部に新設された修士課程の一期生として、日本の武士道は剣道実践で、西洋の騎士道は持ち前の卓越した語学能力で解明すべく、研究者の道に進まれた。武士道と騎士道の比較文化学の草分けとなる研究に挑まれたのである。その成果は「A Study on Medieval Knights and Chivalry」(英文）としてまとめあげられた。それは「西洋中世社会における騎士及び騎士制度に関して、その発生から没落にいたるまでの経過のなかで、騎士の教育・体育の実態はどのようなものであったか、又騎士教育のバックボーンとなった騎士道精神の誕生・変遷」を論及するものであった。イギリス人で日本で講道館柔道を学び流暢な日本語で綴られたトレバー・レゲット氏の『紳士道と武士道』が話題となり比較文化学がもてはやされるようになった数年前のことである。

先生は、関東で高師流の剣道を学ばれ、縁あって武専流の流れを汲む剣道家が多く活躍する大阪で教員生活の第一歩踏み出された。この時から剣道を軸とした教育と研究の日々を送ることになったのである。

早速、新設間もない大阪体育大学での汗と涙の実践が開始された。新参大学が並み居る古参大学に立ち向かうためには、まずもって剣道部活動を充実させることが最優先課題であった。大阪体育大学着任早々の「稽古日誌」(昭和43.

*　埼玉大学教育学部保健体育講座

6.3）は当時の模様を次のように伝える。「学生に剣道の心構えを話しておかなかったことを猛省。伝統のない部の弱さ、部員数の少なさ、剣道意識の欠如など問題点はある。ここで黙って引き下がるか。思い切って一発叱り飛ばすか。後者では朝稽古が本物として定着するか疑問だ。体育大学の学生として、自分の好きな剣道くらいやり通せない筈がない。彼らから剣道をとったら、自信を持って何が残るといえるのか」。彼らが胸を張って世に出られるために、まずは自らを鍛えぬく土壌の開墾から始めねばならなかったのである。

3年後の昭和46年10月12日の日記には「朝稽古、授業2コマ、修道館少年部、夜の稽古、形と今日は計6回稽古できた。稽古したというより、全く剣道ずくめの1日を過ごし、満足して眠れる。・・・やはり剣道は、しかし、自己宣伝にあらず。自分を見つめ一刻も早く本当の剣道に至る道を発見することこそ大切であろう」と当時の心境を綴っておられる。

それから更に3年、埼玉大学転任が決まった昭和49年の11日間の寒稽古では「自分にとって体大監督としては最後の寒稽古になることを思い、〈ありがとう〉と〈頑張れよ〉、〈すまん、許せよ〉の気持ちで、稽古を受ける。掛る方も、受ける方も、涙と汗の混じりあった液体で顔中がクシャクシャだ。この稽古は一生忘れられないだろう」と、感無量の面持ちを伝えている。

6年間を締め括る最後の日記には当時の心境が次のように記されている。「先生に恵まれたこと、学生がよくついてきてくれたこと、先輩、後輩の援助に恵まれたこと。自分に取って大阪体育大における剣道生活は最高の環境にあった。しかし、これで満足してはすべてがご破算だ。これから自分がどう生きるかによって、体大で育てた連中の評価が決まることになるかもしれない。彼らのためにできるだけのことはしよう。今は何もない。心から自分を育ててくれた人々感謝したい」。

塩入先生によって耕された大阪体育大学の剣道部は、先生自らが後任として選んだ作道正夫先生の手によって、今や、関西は言うに及ばず全日本学生剣道界のトップを歩み、大輪の花を咲かせ、次世代の剣道界を担う多くの剣士を世に送り出している。

6年の関西での生活を終え、関東に戻るに際し、最初に自分に言い聞かせたことは「これからの自分の相手は体育学部でも武道学科の学生でもない。剣道を専門に求める集団ではなくて、国立大学の一般学生なのだ」と頭を切り替えることであったという。赴任してからは、高校時代に恩師佐藤金作から叩き込まれた短時間能率主義への方向転換を誓い、通常の稽古は1時間半以上やらないと決めた。今もこの原則は守られている。大阪体育大学在任中には、稽古開始時間はあったが終わりは不定で、部員たちが「膝を崩し一息入れなければ立てない」状態まで追い込むことが午後の稽古修了の基準だった（現在も大阪体育大学剣道場の時計は稽古開始時間の4時を指したまま動いていない）。

埼玉大学の剣道部は埼玉師範学校と旧制浦和高等学校の伝統を受け継いでいる。両校剣道部の指導者として、秩父大宮出身の高野佐三郎が関わったことは言うまでもない。

本学剣道場の正面に掲げてある「錬心清志」と「成功在努力」は高野佐三郎の揮毫である。それぞれ、埼大剣道部の師範であった志藤義孝先生とその後の師範菅沼鳳雲先生（両先生は高野佐三郎の弟子）から寄贈されたものである。塩入先生はこの扁額に埼大剣道部の底流に脈々と伝承されてきた二つの流れを見ている。「一つは、地稽古を重視し、技の冴え、端正な姿勢、理論派の高等師範（高野佐三郎）⇒埼大（志藤義孝）という流れ。もう一つは、武専（斎村五郎）⇒国士舘（佐藤顕・菅沼鳳雲）⇒埼大と、切り返し・掛かり稽古と、量（繰り返し）を重視し、その中から自然発生的に生じる質の向上を待つ流れである」。

埼大剣道部の普段の稽古は短時間であるが、合宿、寒稽古など特別訓練では、尋常ではない

特別メニューが実施され、学生は裸の自分と向き合い、限界に挑戦することになる。

高師流と武専流を程よく調和させ埼大流を作り上げ、今日、学生剣道界でも注目されるほど多大な成果を上げ、多くの剣道指導者送り出しているのは、塩入先生の30有余年に亘る弛まない研究と教育の賜物である。

先生が埼大の道場で求め続け、今後もそうあって欲しい剣風（Team Vision）は、4つの言葉にまとめられた。「1　まっすぐ　2　激しく　3　しなやかに　4　したたかに」である。埼大を去るに当たり、先生はこの言葉を「剣風だけでなく、生き方の指針として役立ててほしい」と望まれている。而して、この4つの指針は、先生ご自身が剣道修業によって育んだ人生の指針でもあったに違いない。

塩入先生は出会った諸先生からの有益な言葉はすべて書き記す。それらは、塩入語録として剣道部の機関誌、講演、講話など、折に触れて紹介・発表されている。教員として、先人が流した血と涙と汗の結晶としての「体験智」を通じて、彼らの精神を語る伝道者としての役割を果たしておられるのである。しかし、先生の真骨頂はそこに留まらないことである。体験に裏打ちされた人生の指針となる活きた言葉を敏感に受け止め、それを単に記憶に留めおくのではなく、自分の言葉として受け止めるために「体験」の労を厭わなことである。その言葉をからだ丸ごと味わい自分の血肉とされるのである。

先生は「体育という学問分野の研究者を目指すものが、人生の早い時点で運動と縁を切ったり、大学院進学を決意すると、学部在籍中から運動部での活躍を断念する学生を目にし、割り切れない思いがある」と、最近の体育のあり方を憂う。体育のいのちはからだ丸ごと実践することにある。この基本をはずすと「人間存在の実相」が見えてこない。

有難いことに「剣道」という文化は、その原型が「いのちのやりとり」であったが故に、「生命の実相」つまり「いきることとは何か・いのちとは何か」というテーマに肉迫する装置として機能し、戦後社会にも受け入れられ、海外にも及んでいる。剣道は、また、老若男女、世代を問わずお互いに剣を交えることのできるという稀有な文化である。先生はこの稀有な世界の虜となり自らを投げ入れてこられた。ここで体得された体験智が基盤となって、研究・教育活動に当たられたといって過言ではなかろう。

埼玉大に来られてから更に貢献された三つの事業がある。一つは、文部省が各競技種目ごとに梃入れした事業の援助が打ち切られたとき、全日本剣道連盟と掛け合い援助資金の増額を取り付け、全国教育系大学ゼミナール及び大会の存続と発展に尽力されたこと（他種目の団体は自然消滅し、生き残ったのは剣道のみ）。二つ目は全日本剣道連盟の国際委員として剣道の外国人への普及に努められていること（在外研究員としてフランスに渡り、帰国後まもなく、5年の間、大学生を剣道指導者として1年間づつ送っている）。三つ目は日本武道学界埼玉支部の設立と発展に理事長として組織拡大、事業の充実に寄与されたことである。

これらの他に、2003年から2005年までの3年間、先生は附属中学校の校長を兼任された。先生の教育への情熱と見識は、この時期、教育現場で遺憾無く発揮された。生徒や関係者に贈られた言葉は、単行本として、『鍛えよ　心優しく―剣道から教わる生き方と教育のあり方（仮題）』（島津書房）出版される。是非ご一読いただきたい。

最近、「心と体を一体としてとらえる」「人と人との間柄の重視」「結果よりも過程の重視」「地域貢献」「社会貢献」といったことが標榜されるようになった。このことは、実際にはそれらが実施されていないことの証左でもある。塩入先生は本学に着任されてから地道に誰に誇ることもなくにそれらの課題に取り組まれ着実に成果を収めてきた。知る人ぞ知る先生の歩んでこられた道が輝きを益すのは寧ろこれからなのかも知れない。

先生には不思議な力と魅力がある。特に、問題解決の為に、年長者で力をもつ人物に話をつけなければならない状況下で、周りの者が躊躇していると、「どうしたんだ。そういうことなら俺が話してくる」と、サッと出かけ、話をつけてくるのだ。30年間実施してきた本学の公開講座「泳げない人の水泳教室」では、参加した学内の職員や地域の受講生をいつの間にかインストラクターに仕立て上げ指導者にまで引き上げてしまう。

先生は、剣道と同じで、まずは相手と真正面に向き合い、歯に衣着せない言葉で叱咤激励し、努力をする者に対し労を厭わない。この姿勢は外国人に対しても全く同じである。「日本人の我々にもはっきりと文字や言葉で表現できませんが、剣道には〈何か〉があるのです。彼らも必死になって〈それ〉を求めているのです。〈毛唐に剣道なんか解かるもんか〉と言うのは自由ですが、求めているものを放っておく訳にはいきません」。そのような思いに駆られ、英語は言うに及ばずフランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、韓国語と外人剣士に話しかけ剣道の虜にさせてしまうのである。今や高段者となり海外で指導的な立場にある剣士で塩入の名前を知らない人はいない。先生の示された「真直ぐ、激しく、しなやかに、したたかに」取り組む姿勢を範とし、残された多くの課題を解決し「体育」のあり方を世に問うべく精進することこそが、先生への恩返しとなる。

退職後は新天地を求めてJICAの派遣でチリでの剣道指導を希望されている。また、帰国後は埼玉大学剣道部師範として後進の指導にあたられる。

「私は剣道を通して自己を見、世界を見ています。剣道という文化の眼鏡は、曇ったり歪んだりしてはいけません。剣道が世界のものとなるためには、剣道に恵まれている我々が本物の剣道とは何かをよく考えて精進し、それを深めていく必要があります」。この先生ご自身の言葉は今なお揺るぐことはない。剣道の〈それ〉を求めて止まない先生の新境地が更に一歩進み、再び我らにお示し下さることを祈念し、餞の辞とさせていただきたい。

（2006年12月6日現在）

略　　歴

氏　　名　塩入宏行（しおいりひろゆき）
生年月日　昭和17年１月８日（満64歳）
本 籍 地　栃木県
現 住 所　鹿沼市天神町1706

（１）学　歴

1965年３月　東京教育大学文学部英語英米文学科卒業
1965年４月　同上　　大学院体育学研究科修士課程体育学専攻入学
1968年３月　同上　　修了

（２）職　歴

1968年４月　大阪体育大学助手体育学部
1971年４月　同上　　講師体育学部
1974年４月　埼玉大学講師教育学部
1977年11月　同上　　助教授教育学部（　同　　上　）
1978年９月　文部省在外研究員（仏国　パリ第５大学）（～1979年６月）
1996年４月　埼玉大学教授教育学部「現在に至る」
2003年４月　埼玉大学教育学部附属中学校校長（併任：～2006年３月）

（３）学会等所属団体名およびそこでの活動

1968年４月　日本体育学会会員（～1985年３月）
1968年８月　日本武道学会会員「現在に至る」
1975年６月　全日本剣道連盟専門委員（国際委員会委員）（～1991年５月）
1975年７月　全国教育系大学剣道連盟幹事、大会副委員長（～1988年３月）
1983年７月　「学会誌」（日本武道学会）編集幹事（～1985年４月)
1986年７月　全国教育系剣道連盟専務理事、大会委員長（～1998年７月）
1990年４月　埼玉県剣道連盟審査員「現在に至る」
1991年６月　全日本剣道連盟参与（～1995年５月）
1991年６月　全日本剣道連盟専門委員（科学委員会委員）（～1995年５月）
1998年７月　全国教育系大学剣道連盟副会長「現在に至る」
2005年10月　全日本剣道連盟専門委員（国際委員会委員）「現在に至る」
2006年12月　国際剣道連盟（F.I.K）理事「現在に至る」

（4）業 績

a）研究的業績

［編著書］

編著書

1　1982年　「ロジャー・アスカムとその体育思想」『大村喜吉教授退官集』(共)、吾妻書房、315-328頁
2　1987年　『剣道の学習指導』(共)、全国教育系大学剣道連盟編、194～199頁
3　1988年　『詳解　剣道の新ルール』(共)、大修館、136頁
4　1992年　『ゼミナール現代剣道』(共)、全国教育系大学剣道連盟編、249～257頁
5　1996年　『小・中学生の剣道観』(共)、全日本剣道連科学委員会研究調査部編、102頁
6　2004年　『教育剣道の科学』(共)、全国教育系大学剣道連盟編、大修館書店、50～61頁

論　文

1　1968年　「A Study on Medieval Knights and Chivalry」(単)、東京教育大学大学院修士論文(英文)、129頁
2　1968年　「運動技術の学習における視覚的補助の効果－剣道の場合－」(共)、『体育学研究』第13巻第５号、80頁、日本体育学会編
3　1969年　「トーナメントの変遷について(その１)」(単)、『体育学研究』第14巻第５号、27頁
4　1969年　「トーナメントの起源と発展に関する一考察」(単)、『大阪体育大学紀要』第１巻、45～56頁
5　1970年　「勤労者における余暇構造と体力及びレクリェーションに関する意識調査」(共)『大阪体育大学紀要』第２巻、43～52頁
6　1969年　「トーナメントの変遷について(その２)」(単)『体育学研究』第15巻第５号、22頁
7　1971年　「フロアサールの年代記に現われたトーナメントの特徴」(単)、『大阪体育大学紀要』第３巻、59～66頁
8　1974年　「大阪体育大学スポーツ技能テスト試案」(共)、『大阪体育大学紀要』第６巻、51～56頁
9　1974年　「シェークスピア時代の鷹狩りに関する一考察　－シェークスピアの作品を中心として－」(単)、『埼玉大学紀要』教育学部人文社会学第23巻、109～117頁
10　1976年　「鷹の訓養・訓練法に関する研究」(単)、『埼玉大学紀要』教育学部第25巻、人文社会学、151～161頁
11　1980年　「幼少年の剣道はなぜ盛んになったか」(単)、『体育の科学』 Vol. 30、日本体育学会編、578～581頁
12　1981年　「フランスの初等学校における水泳指導」(単)、『埼玉大学紀要』(教育学部文社会科学) 第30巻、105～121頁
13　1985年　「中世フランスの狩猟について」(単)、『埼玉大学紀要』教育学部第34巻、73～81頁
14　1986年　「剣道試合時の有効打突とその判定について」(共)、『茨城大学教養部紀要』第18号、247～252頁
15　1986年　「剣道試合時の余勢場外について」(共)、『茨城大学教養部紀要』第18号　253～258頁
16　1989年　「剣道における足の構えと正面打突可能距離について」(共)、『埼玉大学紀要』(教育科学) 第１号、83～98頁
17　1990年　「ヨーロッパにおける剣道家の昇段実態」(共)、『武道学研究』第22巻第３号、日本武

道学会、33～37頁

18　1990年　「つまづきの見つけ方連続技（面－胴打ち）」(単)、『学校体育』１月号、２～３頁

19　1990年　「剣道の広まる過程－国際化の視点から－」(単)、『体育の科学』Vol.40 特集「武道とスポーツ」、杏林書院、105～108頁

20　1990年　「剣道六、七段審査の実態と諸問題」(共)、『埼玉大学紀要教育学部』（教育科学）第40巻第１号佐渡一郎教授退官記念号、61～68頁

21　1991年　「体育授業は『楽しさ』が先か、『うまくなること』が先か」(単)、『学校体育』３月号、34～35頁

22　1991年　「攻防に見る合否の差」(単)、『剣道日本』４月号、スキージャーナル社、18～21頁

23　1991年　「『師家姓名』を読む」(共)、埼玉大学紀要（体育学編）第24巻、93～110頁

24　1992年　「L'Aspect Mental du Kendo」(単)、L' Echo des Dojo、pp.4 -6 、France

25　1992年　「Aspecto Mental do Kendo」(単)、Bushido　No. 39-40、pp. 7-9

26　1992年　「武道の自発的な技術学習における教師の指導性」(単)、『学校体育』７月号、日本体育社、26～28頁

27　1993年　「対人的種目における評価の考え方と方法」(単)、『学校体育』７月号、日本体育社、28～30頁

28　1994年　「起こりをとらえる」(単)、『剣道日本』、スキージャーナル社、18～25頁

29　1995年　「フェンシングの歴史(その１)」(共)、『武道学研究』第27巻第２号、日本武道学会、18～26頁

30　1995年　「フェンシングの歴史(その２)」(共)、『埼玉武道学研究』第１巻第１号、日本武道学会埼玉支部会、17～23頁

31　1995年　「剣道における初歩的段階の効果的指導法」(共)、『埼玉武道学研究』第１巻　第１号、日本武道学会埼玉支部会、９～26頁

32　1998年　「剣道指導者の剣道観を表す言葉の研究」(共)、『埼玉武道学研究』第２号、日本武道学会埼玉支部会、20～28頁

33　1998年　「剣道の防御に対する意識」(共)、『埼玉武道学研究』第２号、日本武道学会埼玉支部会、29～36頁

34　1998年　「剣道における『出小手打ち』の指導段階について」(共)、『埼玉武道学研究』第２号、日本武道学会埼玉支部会、37～47頁

35　2000年　「高校生の剣道部活動における活動実態と競技成績の関連について」(共)、『埼玉武道学研究』第３号、日本武道学会埼玉支部会、１～７頁

36　2000年　「高校生の剣道部活動指導に関する基礎的考察－競技力の差異と活動意識の関連から」(共)、『埼玉武道学研究』第３号、日本武道学会埼玉支部会、８～14頁

37　2000年　「剣道の切り返しについて」(共)、『埼玉武道学研究』第３号、日本武道学会埼玉支部会、９-15頁

38　2000年　「書籍『武道における禅』紹介」(単)、『武道』４月号、(財)日本武道館、162-163頁

39　2002年　「高校剣道部活動における活動ならびに指導の実態と競技成績の関連について」(共)、『埼玉武道学研究』第４号、日本武道学会埼玉支部会、３～16頁

40　2002年　「小学生を対象とした剣道指導の実態とその課題－道場における事例から－」(共)、『埼玉大学紀要教育学部(教育科学II)』第51巻第１号、69～74頁

41　2004年　「剣道の切り返しに関する一考察」(共)、『埼玉武道学研究』第５号、日本武道会埼玉支部会、20～26頁

42　2005年　「剣道における姿勢矯正によるパフォーマンスの変容―突き技の事例から」(共)、『埼玉大学紀要教育学部(教育科学)』第54巻第１号、215～226頁

翻　訳

1　1996年　『剣道和英辞 Japanese -English Dictionary of Kendo』(共)、全日本剣道連盟171頁

b）指導・競技等の業績

［指導歴］

外国剣士の指導

1　1975年　全日本剣道連盟主催外国剣士夏期講習会運営委員・通訳（2005年まで）

2　1976年４月　イギリス、フランス、スイス、ドイツ連邦共和国（全日本剣道連盟派遣）、第３回世界剣道選手権大会参加（日本選手団主務）、親善試合、講習会講師

3　1978年４月　フランス（全日本剣道連盟派遣）第３回ヨーロッパ剣道選手権大会における審判及び模範演武

4　1979年８月　第４回世界剣道選手権大会実行委員

5　1981年　フランス、スイス、オランダ、ドイツ連邦共和国、ベルギー（国際交流金遣）、模範演武、講習会講師

6　1982年　フランス、ベルギー（全日本剣道連盟派遣）フランス剣道選手権大会審判、講習会講師

7　1984年５月　国際剣道連盟理事会（国際剣道連盟事務総長代行）第６回ヨーロッパ剣道選手権大会審判、講習会講師

8　1984年　第６回世界剣道選手権大会日仏合同準備委員会委員（国際剣道連盟派遣）

9　1985年　フランス、スペイン、イタリア、ドイツ連邦共和国（全日本剣道連盟派遣）第６回世界剣道選手権大会実行委員、講習会講師

10　1986年４月　イギリス、スイス（全日本剣道連盟派遣）第７回ヨーロッパ選手権大会審判、ヨーロッパ剣道連盟講習会講師　世界剣道選手権大会、審判講習会講師

11　1986年より　国際武道文化セミナー専門委員（剣道）、(1989年まで)

12　1987年４月　フランス、イタリア、スイス（全日本剣道連盟派遣）第８回ヨーロッパ剣道選手権大会審判、ヨーロッパ剣道連盟講習会講師

13　1988年５月　大韓民国（全日本剣道連盟派遣）第７回世界剣道選手権大会実行委員として組織運営、大韓民国剣道事情視察

14　1989年12月　香港、タイ、マレーシア、シンガポール（全日本剣道連盟派遣）模範演武、東南アジア諸国における剣道指導、支援、剣道事情の視察

15　1990年４月　ドイツ、イギリス、フランス（全日本剣道連盟派遣）第10回ヨーロッパ剣道選手権大会運営支援、審判、講習会講師

16　1990年８月　ニューカレドニア、オーストラリア第一回ヌーメア国際講習会講師、パン・パシフィック大学における講演　第３回ニューカレドニア剣道大会審判、シドニー、キャンベラにおける剣道指導

17　1991年６月　カナダ（全日本剣道連盟派遣）第８回世界剣道選手権大会実行委員、全欧剣道講習会講師

18　1991年８月　ニューカレドニア（以後現在に至るまで1999、2001、2003年を除く11回）ヌーメア国際講習会講師、ニューカレドニア剣道・居合道大会審判

19　1991年11月　メキシコ（以後1995年まで毎年）メキシコ国立自治大学（UNAM)、メキシコ剣道連盟共催剣道・居合道講習会講師、メキシコ剣道選手権大会審判

20　1993年６月　オーストラリア（全日本武道協議会派遣）
日豪スポーツフェスティバル全日本大学武道協議会派遣団団長

21　1994年７月　フランス（レユニオン海外県）レユニオン剣道連盟主催剣道・居合道講習会講師

22　1997年３月　第10回世界剣道選手権大会実行委員

23　1997年６月　ボーリンググリ-ン大学における日本武道紹介演武(剣道・杖道・居合道)

24　1998年３月　第１回パリ大会出場（７段の部模範試合）

25　2000年４月　ヨーロッパ剣道連盟居合道講習会講師（フランス・アンドーラ）

26　2001年４月　〃

27　2001年８-９月　ヨーロッパ剣道連盟剣道・杖道・居合道講習会講師（スペイン・フランス）

28　2001年10-11月　メキシコ国立自治大学（UNAM）剣道・居合道・杖道講習会講師（メキシコシティー・プエブラ）

29　2001年12月　国際交流基金派遣剣道使節（ポーランド・ハンガリー・スウェーデン・アイルランド）

30　2002年４月　ヨーロッパ剣道連盟居合道講習会講師（フランス・アンドーラ）

[大学における指導]

1　1968年～1974年　大阪体育大学剣道部監督　関西学生剣道大会準優勝、ベスト８各１回
全日本学生大会（団体）出場３回

2　1974年～2005年　埼玉大学剣道部監督・総監督・剣道部長
全日本学生大会　（男子・団体）３位１回、出場23回
（女子・団体）優勝１回、ベスト８、１回、出場９回
関東学生剣道大会　（男子・団体）ベスト８、１回
（女子・団体）優勝１回、準優勝１回、３位３回
ベスト８、２回、
全国教育系剣道大会（男子・団体）優勝８回、準優勝２回、３位３回
（女子・団体）優勝３回、２位１回

[競技歴]

1　1971年　全国教職員剣道大会出場（大阪府代表）

2　1977年　全国都道府県大会出場（埼玉県代表、中堅）
国民体育大会出場（埼玉県代表、中堅）

3　1988年　全日本剣道連盟剣道教士七段取得

4　1993年　全日本剣道連盟居合道五段取得

5　1993年　全日本剣道連盟杖道四段取得

6　2004年　全国高齢者剣道大会出場（さいたま市代表、次鋒）

7　2006年　全国高齢者剣道大会出場（さいたま市代表、中堅）